

松屋筆記

卷世三

45
1397
17



門 45
號 1397
卷 17

昭和二十八年八月
高田早苗

松屋筆記

廿三



Handwritten notes in cursive script, partially obscured.

Handwritten notes in cursive script, including the characters 'る' and '廿三'.

松屋年記卷廿三目錄

一 七般同存何出

二 回生

三 梵天王

四 人間五十年

五 年分度者并ツクリ籠山信

六 賜額勅額

七 昇年石屋

八 經筒

九 別臺

- ⑩ 小豆嶋
- ⑨ 朽木家古文書抄
- ⑧ 船中
- ⑦ みゆきこみゆき
- ⑥ 知恩院宮侍状
- ⑤ 松茸の歌
- ④ 古今の序の年女
- ③ 拵
- ② 口宣書
- ① くらどり

- ② だより
- ① さよふさよふ
- ② さろり
- ③ まはかほ
- ④ 唯節唯節
- ⑤ 越節桑縁
- ⑥ 鶴書
- ⑦ 上手上足
- ⑧ 深殿別あ
- ⑨ 唐鶴
- ⑩ 并武蔵母岩

- 卅 馬のまぐさ月毛オホナヒ木目ヒシ
- 廿九 好まき物のとよ
- 廿八 三つ徳かゝる徳
- 廿七 嫁女
- 廿六 秀吉の白旗のまきまきあはれ
- 廿五 白旗大明神
- 廿四 甲陽平軍鑑
- 廿三 正室の刺刀。負室のハ刀。実体
- 廿二 芝刈の左刀

松屋筆記巻廿二

未都 高田屋清文儒稿

一七般同本抄出
 明藏一切經中七般同本二馬鳴菩薩
 薩傳二大徳行 ○四海法王行 ○
 馬鳴の名新 行し同説樹菩薩傳
 二氣樹名新 行し日提法の菩薩傳
 二大天行 ○大自在天行 ○神
 明行 ○天行 ○未嘗有行し同
 是數槃豆天親又世傳二阿脩羅有

有妹名波羅... 安底... 丈夫行... 天般... 剎... 人命短促... 出息入息... 不久便... 惡青... 至枯... 日曠... 星... 人皆... 龜... 天人... 狗... 廣... 羅... 所說... 法... 位... 記... 二十六... 大阿... 羅... 漢... 花

惡青... 至枯... 日曠... 星... 人皆... 龜... 天人... 狗... 廣... 羅... 所說... 法... 位... 記... 二十六... 大阿... 羅... 漢... 花

善者花○無邊施會法

二四生

大智度論卷之八十一
生法各不同諸天地獄皆化生
鬼二種生若胎若化生人畜畜生
曰種生卵生濕生化生胎生卵生
者如毗舍佉彌伽羅母三十二子
如是人等皆為力者如是等
名卵生又濕生者如拏羅維
姪女頂生轉輪聖王如是等名濕生

化生者如神與回氣遊行此立尼氣
中有此立尼名阿羅羅地中化生
及劫初生時人皆化生如是等
為化生胎生者如中人化生人即
時長大能到佛所有人報得津
通故能到佛所復次佛信神力故
能到佛所言俱舍論卷第八
分別世品一十一以卵生胎生濕生
化生是名為同生之六之說

三梵天五

大智度論八卷下復次如書云
時一切皆空業生福德因緣力
故十方凡聖相對相觸能持大水
水上有一千頭人二千手是名爲
華中有一人從地中生此人復有
無量光明名曰梵天王此梵天王心
生子八子生天地人民俱會滿
八分別世品一經之大梵王の事

④ 人間五十年

人間五十年といふは俱舍論十一
分別世品梵天の事大戴礼
上壽中壽下壽の事

⑤ 五百年の度者并壽の事

嚴岳尊記上梵天の事引授舊の記根
本大師講最澄依姓三津育近
江國志賀郡人也先祖後漢孝
獻皇帝之由新登之爲王也輕嶋
明宮所宗天皇之世遠皇の聖明

年分度者
意之云々

歸于仁化仍賜臨賀地自此改姓
三津首也去近曆甲午歲改姓
中甸登陸敷峰結律為在
奉為回恩每日轉讀法華維
金光明仁王般若等經一心精
勤同七年歲次奉為桓武天皇
創建根本一乘止觀院也今謂中堂是
長講于同廿年歲次正月廿六日下
教給每年試度此處隱那經
齊訶止觀兩業年分度者各與

於此時弘仁二年歲次七月建之
法華三昧六月十日更下勅編言前
年歲次六月十日更下勅編言前
件二人年分於此敷山寺出家塔
度即十二年不取山三種三昧令
得修練之詔管尾山之痛記自於
斯一輩云々ある年分度者あり
聚之休務云々あり

名物之階器財等三件
大德寺社位進帳
同書の上皇危杖子
天長元年賜額号ス

今書下三
弘治四年
真徳太子
時方勅賜額

本學院之勅額、今の勅額なり

七 草葉年石書

同書下卷、於此、慈覺大師元長
年中初入學院、以草葉為堂、修田
種三味坐禪之際、以草葉為年、以
石為堂、三四年之間、年書、寫妙法
華經一部、君納十塔、云々、此
手自、以草葉為年、以石為堂、以禪定
智水一字三不書、云々、妙法蓮華經
云々

此書鏡六
甲才全書
寫如法蓮納
銅筒

八 經筒

同書下卷、於此、如法蓮銅筒記
此の也、銅筒の口面を、若くは所
謂、經筒、その記文、所由を、云々
と記す

九 別書

別書と、いふ所の、板非遺使、別書、并
學院、淳和、院、の別書、内陸所、内
教坊、内膳、の對子所、大歌所、案
所、大學、藏人所、の別書、類、皆

⑩ 小豆島

河原代村本村家古文書の子云
小豆島 村本家所

- 一 庄屋家尾 尾代出 尾つ おんぶ
 - 一 末五拾石 山役
 - 一 同之拾石 之申九外六名 綱役
 - 一 同之申八外 帆別 綱運上
 - 一 同之拾石 綱運上
 - 一 同之申八外 尾代出 尾つ おんぶ
- あり 小豆島 古く 口本紀の歌子 あり

キ多のとき今倚りせうド家とす
倭漢三才篇 行書 あり 考一

⑪ 杉木家古文書抄出

近江国杉木右領主杉木兵庫助
家の文書 數十巻あり ○ 永和三年十

近江国高嶋郡内本新西庄郷

台地頭職以下所職 散在 右五

内針 あり ○ 永和三年 青杉木庄

近江

直書記 四五
世少目 目司
随七 庚 欽家
併也 八

本庄

名田 町

庄内

名字地

念佛田

丁村

併名地

国高嶋郡朽木庄針畑寺永正十三年三月

○永正十三年三月江州高島郡針

畑庄正安元年十一月針畑村高嶋郡名字地

○連武藏年五月大山寺念佛田

念佛田貞和四年六月丹後国

保良村内若光名○永仁二年二月

本庄併名地内案立名并後一併名地

頭職一併名地○永和二年九月

近江国高嶋郡若光名○二日

近江国高嶋郡若光名○二日

田所未
上庄
下庄

安堵下文等上沙法氏季

代明徳三年三月江州高嶋

郡保坂貞和元年七月

播磨国田所未上庄田所未田田所未

合田所未上庄田所未田田所未

斗田所未上庄田所未田田所未

斗田所未上庄田所未田田所未

丹後国保良村内保良村地

頭職播磨国在田上庄内保良村地

寺保良村地保良村内保良村地

寺保良村地保良村内保良村地

地以休

滑澤草

繩佐了同西地了了了。○永仁七年
 久多庄地以休負能朽不在地
 歌以祐聖了了。○曆應貳年近江
 国了了為大十庄西庄職并舊一
 地以職了了了。○其永元年近江
 国了了為向郡深桑八里十二坪
 了了。○其大所園一色田也了了。○延
 三年二月十日三重生郷内十桑七里
 日又了了。○其川親孝消息
 十七坪了了。○滑澤新了了。○其
 子備中了了。○滑澤新了了。○其

一厘草色草在部子滑澤ナスナキ
 曆中次記廿三ノ

少、記是方返了了。○次は一
 等、合抄御、毎、少、所、等、情
 一、所、少、所、謝、了了。○其、一、古、文、狐、一
 臣、能、上、登、了了。○其、一、古、貝、抱、上、了了。大
 能、上、不、登、了了。
 与清、お、子、江、戸、の、執、事、地、い、も、併、地
 の、新、れ、や、十、多、の、里、も、多、家、の、新
 ら、出、羽、の、庄、内、す、上、庄、下、庄、本、庄
 新、庄、れ、も、い、あ、氏、の、出、羽、れ、も、少、り、ん、之
 へ、は、あ、る、と、い、ふ、し、

(七) 射干

武蔵多摩郡相模、高尾郡安
日郡、アノノの土依屋上、芝、
馬、カウシヤウギとよみ、草を、
カウシヤウギ、オ、シヤガとよ、
貌、ヒアラギ、似、花色、紅、
蒿、蒲の花、相似、和名、
射干、一名、烏扇、和名、加良、
木とあり、射干の、
誤、シヤカ、とよ、又、説、シヤカ、

シヤカ、カラシヤウギ、とよ、
アノノの、説、
(七) み、
み、ふ、
身、
と、
水、

アノノの、説、
(七) み、
み、ふ、
身、
と、
水、

所内、五、方、先、般、
(七) 初、恩、院、宮、傳、
傳、

新皇嘉門院持是去之節所進
善之義依内

勅所中陰所法時所別時所修
行且所七日每一所速夜所高日
諸多請所免之ニ條身念寺前
位并至誠心院は法治之御身數
百人余之多請は所十念以下所
多

内之每度りの蒙
勅問諸事起過之法門及安心起

行等之所説話ら成進之滿
所中陰所多

内之砂刻
勅之一枚起請文所演説所并

他日
勅修所付

殿覽見らあり候所願
仙洞様ニ或所所信心は為増
少殿都而之所沙汰は之に於
所門主系代末聞所懇切に所

ふるきり
まのきり
あつしほ
はまのきり
まのきり
あつしほ

登偏佛は興隆別るの宗門に
芝暎 本山の内方者勿論あり
大信の心方、深重難を序
感悦は心を依り
序門主に侍隨喜をいへ所道多思
召かき事

あつしほの
の諸寺への願物に
増上寺に願了大信の心

①五 松茸の歌詩

松茸の歌詩
松茸の歌詩
松茸の歌詩
松茸の歌詩

松茸の歌詩
松茸の歌詩

松茸の歌詩
松茸の歌詩

松茸の歌詩
松茸の歌詩
松茸の歌詩
松茸の歌詩

松茸の歌詩
松茸の歌詩

松茸の歌詩
松茸の歌詩
松茸の歌詩
松茸の歌詩

そのつとまの食をさるるけの
ゆるはるあんとぞおりの
たしきりいど

わきののりつとまのあつと
まの食の雨のりつとまの和
名抄菜美部部の葡萄の崔高
鶴食位の葡萄の食之温有の毒
状如人若の也南雅注云葡萄
有木葡萄土葡萄石葡萄の名皆多介
子の野菜類部子南雅注云

葡萄の形似の也曰聲字花云菓
木耳即木葡萄也状似人身而
和名木乃美々の也の品
俗も若々の木身の今俗のナク
ケといふ物の魏海月の似の也
さうぶのちの心の今昔物
詔字治指遠の平の和
多利のなの名の也
古今の序の未の也
古今の序の未の也

をみちのあてつくりしうりけるけり
のつとことありそかゆりしとあまけ
なごしりいれどばさすかりけれ
くねあけりける女のけりけり
ゆるるちりしれをちりきり
かへるしりしりわあひ万葉十
采かとしり綺詰抄上山の井の
しりあひりぬりしりい吉序の
脱文ちりしりちりしり

持

歌名判の勝負なりし持とよめい
と勝負を争ひ物子あもし内裏本
中巻付了六日觀馬射式子到此標
木下走馬逐逐若持者終而更始と
あり

六 口宣出

△辨ハ大石大辨
の辨人頭を辨
ハ大石大辨
ハ大石大辨
ハ大石大辨
ハ大石大辨
ハ大石大辨

口宣とよめい位以上のを授けし頭
辨とよめい勅あり辨口宣を認て上御
子遣いその口宣を家子留て別子書字
し大外記子遣いにも口宣書とよめい

やぶいざよみ武人のまきう傾^カつる
子^カよこいよ^カ理^カを^カま^カづ^カる^カべ^カ定^カ正^カの
義^カも^カその^カ時^カきの^カと^カい^カま^カら^カは^カる^カよ
づ^カ—和^カ宗^カ武^カ部^カ集^カ三^カ子^カ木^カ幡^カ信^カ都^カ
の^カあ^カや^カけ^カら^カく^カづ^カつ^カ子^カし^カや^カと^カそ^カ子^カ
と^カあ^カづ^カけ^カは^カら^カる^カの^カゆ^カえ^カは^カら^カる^カは
時^カきの^カの^カと^カい^カは^カる^カよ^カま^カづ^カい^カと^カま^カは^カる^カ

世三 まろくろり

徒^カを^カ子^カ才^カ子^カ殿^カ子^カ盛^カ親^カ信^カ都^カあ

の^カ法^カ師^カま^カく^カて^カま^カろ^カう^カり^カと^カあ^カ名^カ
ま^カけ^カた^カり^カし^カら^カよ^カら^カあ^カる^カあ^カら^カの^カ
と^カい^カけ^カら^カら^カる^カあ^カら^カと^カあ^カら^カる^カけ^カ
若^カあ^カら^カし^カら^カら^カけ^カは^カら^カる^カあ^カら^カる^カ
と^カい^カら^カる^カと^カい^カら^カる^カ。懸^カま^カら^カる^カま^カら^カる^カ
り^カを^カ傳^カ授^カの^カ説^カと^カん^カ文^カ殿^カ抄^カる^カ位^カ
や^カび^カ大^カ全^カ子^カ一^カ義^カ子^カ云^カま^カろ^カく^カと^カ句^カを
あ^カら^カし^カよ^カま^カら^カる^カあ^カら^カし^カら^カる^カみ^カま^カけ^カら^カ
説^カに^カ口^カウ^カカ^カリ^カと^カま^カら^カる^カあ^カら^カる^カ
説^カと^カあ^カら^カる^カあ^カら^カる^カあ^カら^カる^カあ^カら^カる^カ

ふよとらちぢつとくえつらう。とえき
うかりをし義理をもむい盛和子貴
名世付らう。信ちふいむいやぶ
愚三熾うらん。おまよ歌の色白くし
ウツカリとよつる信えしこそあめさん
ぶこそしウツカリとよおえつる又
りとも略ゆることい奇きあはるす
えんやウハしをアハしモウテをモテのい
ぐえうかばきふんありまし。与信按
徒然草活字存よきうりとうり。書

命院抄まじしウツルりとをきとらう
けい白瓜とよすまむどしウツルり
らうも解がしむきいけはウの誤
ぶらうとよむと多存えんしウツルりと
あまかふいそのあふ後ぶらうしウツルり
よまその歌色のけい歌えと瑠璃
のこむるけいけい瑠璃とにいり
め法とて歌えしまはかす信といあ
おのうり。古説子母のな帆片帆

の類 ニカホ 真 カク 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片
其 カク 類 ホ 片 ホ 類 ホ 片

昔高尾彦士の巻 世彌子准布陸
佰七拾肆段貳丈内見布貳佰

陸拾七段 〆 陸拾准布世段
同脱漏 〆 〆 今日止准布可用銅
錢之由被仰下武州殊令申沙汰
按子准布平布の裁に字書子准
準估字説文平也禮記月令
先定準直正裁諸輕重平均
其外平準の所見あり 類聚雜
要曰是是平子准布千八疋
平絹の裁し絹布の平は上品
と上布上絹とを地を准布准絹と

ハソウリと云ふ

④ 越布系録

昔東鏡三の巻 下丁子系録一足
越布一端とある系録は 錦のり子
越布のり子 後漢書 卷上明
徳馬皇后紀 白越三千端 注子
白越越布云々 同書 卷下陸績
傳子祖父黃字子者 達武中
為尚書令 吳景 無著越布
單衣 光武見而好之 云々 ありて

越の国より 上氏布の名ある 此
布を越布と云ふなり 用一し

⑤ 鶴書

昔書鏡十三の巻 下丁子 伊予供養
之間 義資 投鶴書 於女房 聽聞
所記云々 妙よ 艶書 のり子 鶴書と
云ふ 宋史 禮志 鶴仙人の書あり
云々 古今 篆隸 文體 鶴頭書あり
北山 移文 鳴鶴 入谷 鶴書 越職
あり ありと云ふ 艶書 のり子 あり

この鶴も女よいよあまのうらこ鶴書と
なつたこつ

⑤七 上手と足

ゆの名人も上手といふも暑あつたえ
いさえほもいふつやう鞠の上と足
といふり昔の鏡七の巻花子鞠の
と足のうらこ

⑤八 深殿別当并武蔵深谷

武蔵国深殿別当といふす昔妻鏡
十五世十八代おじかむと今も是

立郡多飛郡 かくは深谷深屋は
いとお名ありいさしうらこの深殿の
ありいさし

⑤九 唐鶴并ドバト

昔妻鏡七の巻七代子唐鶴一羽さ
うま今のドバトし和名物といふドバトとを
ドバトはタウバトの訛なり

⑤十 馬のさく月毛木目額

馬のさく月毛のいさしけりけりけり
あがらむといふ名昔妻鏡七の巻
かたてす

ろもさくつきのあづき 筋餅の巻
首をさくつきのあづき 筋餅の巻
山柳のさくつきのあづき 筋餅の巻
なまのさくつきのあづき 筋餅の巻
毛をさくつきのあづき 筋餅の巻
④ 好まぬもの
俗言の好まぬもの
い源氏 信后 狩子
子よふくくして 巻をさくつきのあづき

ゆきうあな ちんまをさくつきのあづき
なづきやまなぬあをさくつきのあづき
こえたるあな ちんまをさくつきのあづき

④ 好まぬもの

本名 宣毛の流子 半波 櫻の加本は
孫の流子 加平 脱たるは
とまらぬもの 藤佐理 卿 貞蹟
の近は 所息 所歌 存子 加本は 孫
知らぬ 加平 加本は 孫
孫を おとす 加平 加本は 孫

まんあらし
あまのこゝろ我こゝろやよりのりこゝろ
ちりまほふをしこゝろ母あはれこゝろ
うゝ二種こゝろこゝろこゝろこゝろいん家の
記いめやありしこゝろこゝろ

世 妹女

万葉の妹女と乞たきやたをよめたり
大智度論卅三の巻 行釋初品中
到彼岸等のありて如釈迦文佛の
家時車匿給使優陀耶戲笑

瞿毗耶の鞠陀等諸妹女の内
春之属言以外佛書字所見の
字典公集韻此等切音采女字
又倉代切音采我同しあり

世 秀吉公前攝宮系譜

武辺咄問書 一名武信 叢話 二の巻より小田原

河城の地秀吉公其子奥州より
初より本御湯倉内之御持に
一所多治白幡のありしありし
形を也我朝の御後を以て

世に送す録
倉田のありし
下能はる
こゝろ衣冠を授け
ふて頼朝の
家ありしは
まはるありし
る清はるありし
上はるありし

清正の風を
あつては
清く濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば

あまきと社壇一清なり
わが朝は清なり
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば

清く濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば

あまきと社壇一清なり
わが朝は清なり
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば
清の濁らば

の昔の事
みよし
かきし
かきし

老朽の事
子白旗の事
の事

④ 甲陽軍鑑

同書二の巻に武田信玄が新羅三郎
戦老より廿七代と甲陽軍鑑子の
以る大物の説に新羅三郎より信玄
を十九代たりとて甲陽軍鑑を
我よりありとて又文十六年二月十七
日八幡子に信玄諸佐山本勘助を

西国の沙汰を以て召し大内義隆を
家老陶庵張守時賢を討ちしや
子時諸大内義隆滅亡又文廿年
九月の事と山本勘助の事と
子時滅亡と大内と
信玄の事と治し又文廿二年八月十八
日川中島の合戦と弘治二年三月廿五日
川中島の合戦と又度比治の甲
陽軍鑑より一度より
永禄四年九月十日と記し

禄四年九月十日の川中多合戦の上
杉原の沙汰は何と我親頼松野
大學物況けりとき同書四の巻より
上校義春のそ入有い公方より隠居は
仰付糸都敷を所と閑居やれ一の
指す西眼首がの従のゆり老
の物も讀やんは候寔永十二
河内軍地地ある人おま一
の心入有はる何大はるおま
才一謹信を振る意の事と云

謹信の名氏也此の村の軍忠
之為人謹信の字中義の孫
義弘初也度此氏の子孫也
号の概有はる大を次男持を
妻を有まはる見才の白を
又也危義事とてはる公方
義事とてはる公方又天の
記録に公方美陽院義所と
義事とてはる公方他界の
事也其の事也

上校女平朝定との致平又三
 此日中其の書しあると校の原
 勝る川物の今致の九年好天
 上校女平朝定の致平又三
 此日中其の書しあると校の原
 勝る川物の今致の九年好天
 上校女平朝定の致平又三
 此日中其の書しあると校の原
 勝る川物の今致の九年好天

正宗の秘刀負名
 此日中其の書しあると校の原
 勝る川物の今致の九年好天
 上校女平朝定の致平又三
 此日中其の書しあると校の原
 勝る川物の今致の九年好天

同々のまじりにぬきゆる糸の物に
まじりたる物の隙をとおの帯の
の刺刀はるまの刀をまじりたる
一紙の七葉のわらわの物に

Handwritten scribbles and characters, possibly including the name "Miyamoto" and other illegible text.

Small handwritten mark or characters in the bottom left corner.





